



鶏 けいめい 鳴

〒221-0864

横浜市神奈川区菅田町2851

(電話 045-473-7191)

パウロの言葉

「蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し〜」

聖書(第1コリント書15章42節)

牧師 河合裕志

人の一生は死をもって終る、と普通考えられている。普通って、これ以外の考え方があるの? ない、ない。死はまさに一卷の終り。あとは何も無い。

こうした一般常識に対してパウロは「復活」ということを言う。死の後に復活があるよ、と。そんな事、とても信じられない。ここはひとまずパウロの言い分に耳を傾けてみたい。

「蒔かれるときは朽ちる」とは人間はオンギャーと生まれて、やがて朽ち果てることを言っている。青年期、壮年期の盛んな時を経過して老年期に至り、立ち木が朽ちるように人間も朽ち組織は分解する。骨となり灰となる。

ところがその後、神の大能の力によって、キリストがその「初穂」となったように死者は「朽ちないものに復活」と言う。

「朽ちないもの」と言うのだから、それは永遠的存在ということになる。

同じようにパウロは続けてこう記す。「蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し」。私達の一生はそんな立派なものではない。結構下品なことを考えたり、口にしたり、行っている。そんな者が死後復活に与って「輝かしいもの」に変えられますよ、と。

イエスも言っている。「死者の中から復活するときには……天使のようになるのだ」(マルコ12:25)。天使のように輝かしい存在になる。聖められ、天にあって神に仕え、天から人を守る者となる。

もう一つ、パウロはこう述べる。「蒔かれるときは弱いものでも、力強いものに復活するのです」。私達、精神的にも肉体的にも充分強いとは言えない。多くの弱さを持つ。時に心は病み、肉体が病む。こんな私達も充分に健やかな心身の持ち主とされる、と。

以上三つの特性を持った復活体についてパウロは「霊の体」と言っている。朽ちない、輝かしい、力強い「霊の体」で天国で生きると。もしそうであるならば「復活の日=永遠の日」が私達の生きる最終目標となる。パウロはそこまで考えている。

そんなことはとても信じられない。これはまさに信仰の問題。信仰は強制できない。ただ同じ生きるのであれば、死のかなたを仰ぎ望みながら生きる生き方もあってよいのでは? 日々苦勞しながら生きている私達の前途を輝やかな日が続いていることを覚えて歩むことが出来れば幸いというものでは。

集会案内

日曜礼拝：午前10時15分、日曜夕拝：午後6時

子どもの教会：日曜日午前9時

中高青年会：日曜日礼拝後

聖書を学び祈る会：水曜日午前6時、午前10時、午後7時

お話し会、(面談)：水曜日午後1時~7時